

皆さんおはようございます。

今、プレゼンのプリントアウトしたものを皆様にお配りいたしました。さらに、皆さんの前にあるファイルの中に、CSTBの2007年版のアンニュアルレポートも入っております。

私の方から、CSTBの現在の事業内容、さらには、建築分野においてCSTBがどのような活動を行っているかについて、簡単にご説明いたします。

(\*以下[ ]内番号はパワーポイント資料のスライド番号)

[2-3]\* 我々の役割は、建築及び物が建てられた環境の中で、品質、快適さ、安全性を守ることです。それを研究開発及び情報交換を通して実現しています。さらに、技術、経済の効率性を建築分野で確保すること。さらに、効率の高い形で技術革新を保証していく。これはさまざまな実験なり試験なりの実施、さらには認証を通して行っていくものです。その中でも一番重要なものとして、最近の環境と建築を包括的に扱う形での認証機関としての役割が大きくなっております。

[4] さらに、皆様にCSTBのステータスをもう一度確認させていただきますと、こちらは、工業、商業的性格を持った公法人でありまして、NPO、非営利団体という位置づけになっております。

先ほどモガールの方から指摘があったとおり、理事長は政府の任命になります。

理事会のメンバーには、建築界を代表する人間が入っており、さらには監督官庁からもメンバーが入っております。

[5] 我々の組織図、組織体制に関しては、アンニュアルレポートの中にも入っておりますし、皆さんもよくご存じかと思いますが、1つだけ最近の新しい動きとしては、横断的な持続可能な開発を扱う部門が新設されたという点です。

[6] 次に、CSTBについて数字を幾つか挙げたいと思います。

60年以上の歴史を持っております。

職員数は約800名。基本的にエンジニアとテクニシャンと呼ばれるタイプの人間です。

事業収入は、7,900万ユーロとなっております。

この点につきましては、CSTBはこれからもさらに規模を拡大して、鑑定能力を上げたいとも思っておりますけれども、それだけではなく、パートナーシップ及びネットワークを活用しての事業拡大も現在模索しております。

CSTBには4つの子会社がありまして、関連団体がありまして、そのうちの2つは認証機関、1つが空力の試験所、それから、最後が音環境に関する研究所となっております。

さらに、我々の技術鑑定能力ですが、1,000以上のアグレマンを出してありまして、1,300以上の工場が我々からのこうした認定を受けております。そのうちの30%が外国からのアプリケーションです。

一番下にある2つの数字は、我々のウェブサイトへのヒット数、さらに一番下の数字がウェブ

ジンへの登録者数です。ぜひ皆さんの方でもうちのウェブジンを登録してご覧になってください。

ウェブジンと私が言っているのは、インターネット上を走っているニューズレターのことです。まだこのニューズレターをお受け取りでなければ、私の方にお申し出ください。すぐにお送りできるようにしますので。

[7] これが我々の事業収入の内訳です。

このとおり我々の技術的な事業がその大多数を占めております。

[8] R & Dの理事として、4つのR & Dの分野についてご説明をしたいと思います。

我々のテーマは非常に幅広いものがありますし、また鑑定能力も非常に幅広いところを扱っています。ただ、こうした形で総合的に我々のノウハウ、実力を高めようと努力しています。

それを大きく4つにまとめますと、1つが持続可能な都市。2つ目がクリーンで効率の高いビル。3つ目がリスク評価とリスク管理。4つ目が効率の高い建築及び社会の変化というテーマです。

左側の方に、我々が保証しているさまざまなサービスの提供部門を挙げておりますけれども、一番上のところが事象の理解。これは建物という物理的なさまざまな現象を理解しようというものです。

2つ目に、新たなソリューションをインプットして貢献していく。これについては、品質保証の考え方、また、メーカーの品質を高めるといった我々の貢献もあります。さらには、高い性能のあるソリューションを提供するということにも我々力を入れております。

下にあるのが我々の顧客の一覧です。これはいろいろなレベルがありますが、各当局、国、EUレベル、自治体、建築関係のさまざまな職業、実際に建築をする人、建築材料をつくる人、さらには実際に建物を使うユーザーまで広く含まれています。

この表を見ていただきますと、我々の研究がどういうところに軸足を置いているかがよくわかるかと思いますが、それだけではなく、我々の技術的な組織体制がどうなっているかというものもよく反映しています。

モガール その点について一言述べておきます。

この表の中にある、例えば持続可能な都市であるとか、クリーンで効率の高いビルだとか、そうしたものは、実は我々、研究体制の組織としてグルネル環境大会議が行われる前から、既に問題意識として持っていたものです。そういう意味で、グルネル環境大会議が行われたときに、政府も、またサルコジ大統領もあれだけ思い切ったオプションがとれたというのは、ある意味では我々研究者の側がそうしたテーマを先取りしていたからだ。そういう意味では、我々研究者の先を見通した勝利の一つのあらわれだと考えております。

ベリエ 我々、こうした研究の体制に沿って作業をしておりますが、それだけではなく、外とのコミュニケーションにも力を入れておりますし、大学の研究者たち、さらには科学研究センターなり、また産業界の企業のセンターとも力を入れる形で、そうした外のエキスパートとも協力体制を怠っておりません。

さらにもう一つ、我々、研究機関というだけではなく、コンサルタント業務もCSTBとして扱っております、その鑑定能力には定評のあるところです。従来型のさまざま鑑定も行いますが、それだけではなく、極めて大規模なプロジェクトで、なかなか解決が難しい問題に対して新たなソリューションを提案するような努力をしています。

どのような分野に我々がコンサルタント業務を行っているか、非常に幅広いという幾つかの例

をここで見ていただきましょう。

[9] 例えば、これは高速列車の例です。TGVのパリ-マルセイユ線の中で強風の影響、特に横風の影響、これがどう出るかというコンサルタント業務を行いました。

その次の例は、照明のコンサルタント業務を行った例です。例えば、エアバスインダストリーの工場内の照明。さらには、歴史建造物の照明。アメリカのどこの美術館、博物館だったか忘れましたが、そういう建物の中の照明も扱っています。

[10] それから、こうした吊り橋のトラスの振動の影響をどのように見るかというコンサルタント業務。これはフランスのニョウ大橋の例です。

[11] キリヨン橋という、これはギリシアの大橋の例です。

[スライド12] この例は、リールのユーラリール駅という鉄道駅ですが、そちらで火災に対する避難の安全性のコンサルタント業務をしております。

アレキサンドリアの図書館の照明の研究。

これが北京オペラ劇場の音環境の研究です。

[13] 今度は技術鑑定の方に移っていきます。

CSTBの技術鑑定につきましては、皆さんもよくご存じだと思いますが、最近の新しい動きとしては、新たな開発なり、イノベーションを行う川上側でのさまざまな規制や立法化の正当化を図るためのインベントリーというのを行っています。

これは、英語ではディベロップメント・アナリシスと言われるものです。それから、もう一つ、新たな非常に革新的なプロダクトが出たときの初回仕様のためのさまざまな技術鑑定。

欧州の技術アグレマンは基本的にうまくいっておりますけれども、そういう中で、実際にCEマークがつけられるかどうかの評価をきちんとしていかなければなりません。

[14] 実際に、市場にこうした非常に革新的なタイプの製品が上市されるまでの開発のところの一連のオフィスの側からの動きをグラフにしてみました。

こちら、縦軸と横軸で実際に製品が市場で販売されるものと、それから、投資のコストを表しています。

横軸の方を見ていただきますと、左から右にかけて、このグラフの線をずっとたどっていただくと、一番右側がまずターゲティングです。ターゲティングでアイデアを絞る。その後、実際に開発を、新たなアイデアを開発に落とししていく。それを3つ目にバリデーションして市場に投入する。その後、ぐっと線が上がっているところが成長で、その後、頭打ちになっているところが成熟市場ということになります。

[15] 今までは、こうした技術鑑定を市場に投入するときか、またはその直前にやっていた。当然ながら、その川上側にはさまざまなテストやシミュレーションがあるわけです。

[16] それが現在では、新たなアプローチとしまして、ディベロップメント・アナリシスをかけていく。ここでいろいろなアイデアをインベントリーとして、どの技術を最終的に市場化する商品に使うかということを引きちんと押さえていきます。

新しいのは、下にあるイノベーションアセスメントと書いてあるところでして、イノベーションの評価を行う。それを実際これからフランスで初めて市場に投入される製品の評価に使っていきます。

ここで、初めてのプロダクトを投入するメーカーには2つの可能性があります。

1つは、これは初めてフランスの市場で使われるものだということを1つのリスクとして、そ

れはある程度の期間のリスク管理をし、それを投資家や保険会社に対して説明をしていく。例えば、2年間はこういう形でこの製品を投入してやっていく。その後従来型と同じ技術的なアグレマンをとって、その後は従来型の形で進めていくというものです。

[17] 先ほど私の方から子会社のお話をいたしました。セクアビとっておきまして、こちら、認証機関となっております。130の建設会社がこちらの方の顧客となっております、年に1万2,000件の住宅がこちらの審査を受けております。

[18] もう一つの認証機関は、第3次産業サービスビルのタイプの環境品質を認証するものです。

次に、我々の試験能力に関して、最近の新しい動きをご紹介します。

[19] C S T Bには40のラボがあり、55の異なった技術的な分野をカバーしています。大きく5つの設備を持っておりまして、そのうちの2つ、アクアジムとビューカンが現在建築中です。

[20] 最初に、ジュール・ベルネですが、これは皆さんご存じの風洞です。風洞の中で気候条件の再現ができる雪、雨、風といった条件です。特に軍隊に対して、砂嵐のようなシミュレーションをすることもできます。

[21] 次のラボは、音環境のラボでして、これはさまざまな需要にのっとり、かなり早く結果を出せるタイプのラボです。

[22] 次に、イマージョンルームと我々が呼んでいるタイプの設備で、これについては、後ほどビデオを見ていただきます。こちらの方は物理的に、例えば都市の再生などに使われておりまして、その中でも特に音環境、それから、建設のさまざまな影響を見ることができます。例えば、汚染がどのように広がっていくかというものを、これで実際にシミュレーションしてみます。

最近の開発では、大きな工事現場から出る騒音を分析できるソフトを開発いたしました。

[23] こちらのスライドが、我々が現在進めている2つの大きなプロジェクトでして、1つは、水のサイクルを研究できるタイプの施設。もう一つは、大きな炉でして、こちらで、例えば新たな防火扉などの耐火性を評価しようというものです。

[24] 次に、C S T Bのさまざまな取得認証をご紹介しますと、まず、我々、フランスの認定機関であるc o f r a cからのさまざまな実験、試験に対する機関としての認証を受けています。さらに、I S Oの9 0 0 1に関してはA F A Qからの認証、さらに、機械試験に関してはi A Sからの認証を受けています。

以上で私の発表を終わります。